

## 教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山市立堀川中学校・教諭・松尾 篤、教諭・矢後 誠
- 2 研修期間 平成30年11月26日（月）～平成30年11月28日（水） 3日間
- 3 調査研究課題 『学び合い』を主体とした授業を展開するための実践力・指導力向上を目指して
- 4 研修機関等 上越教育大学  
上越市内協力校

### 5 研修の概要

#### (1) はじめに

本校は今年度、学力向上拠点校に指定された。また、次期中学校学習指導要領 総則編 解説には、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。」とある。そこで本校では、「主体的・対話的で深い学び」を達成するための考え方や具体的方策として、上越教育大学教職大学院教授 西川 純先生が提唱している『学び合い』に着目して研究を進めている。『学び合い』を授業の中で実践している上越市内の各学校を訪れ、授業見学等の研修を通して、本校全体の授業改善に生かしたいと考えた。

#### (2) 『学び合い』とは

西川先生が提唱している『学び合い』とは、一斉授業で教師が、教えたことを教えたように教えるものとは異なり、①授業中に生徒同士が教え合って、教師の設定した課題を達成していくという方法で、②必ず「全員が課題を達成すること」を一番大事にしていくものである。①のメリットは、一斉授業では、生徒個々の分からなさに、教師一人がすべてに対応しきれないため、生徒同士が教え合うことで、友達がどこにつまずいているかに教師よりも早く気づき、結果的に早く授業内容を理解することができるということである。また、生徒同士が関わり合う時間が多いため、コミュニケーション能力や人間関係作りの能力の向上につながる。②のメリットは、一人ではなく「全員が」課題を達成することが浸透していくと、できない子が一人だけ放っておかれることがなくなり、①同様、コミュニケーション能力や人間関係作りの能力の向上につながるということである。

#### (3) 上越教育大学、上越市内協力校での研修

（参加者：金沢市立高尾台中学校教員3名、韓国からの研究生（現職の中学校教員と高等学校教員）2名、関西学院大学3年生1名、本校3名の計9名）

様々な校種における授業を見学した。活動時間（課題に取り組む時間）を設定し、教師が提示した課題を全員が達成できるよう、『学び合い』により自由に席を移動し、教え合う姿が見られた。「分からない」ことを素直に生徒に伝える姿や、困っている生徒に教えに行く姿等、「全員が課題を達成する」ために自分にできることは何かを考え、個々が活発に活動しながら集団として高め合う様子が見られた。教師は児童生徒の活動する姿を見守りつつ、集団として高まるきっかけとなりそうな場面を見極めて、その都度適切な言葉掛けを全体に広めていた。

また、発達段階が上がるにつれて、できない子供やその教科が苦手な子供への関わり方も異なっていた。小学生は、教室全体を移動しながら、できたかどうかを確認し合い、できない児童を発見した場合、大人数でできるようになるまで丁寧に関わっていた。中高生になると、生徒自身が話し合ってローテーションを決め、自分の学習の時間を確保しながら順番にできない生徒に関わるといった姿が見られた。



前に置いてある解答を確認する児童の様子



自由に机を動かし、学び合う児童の様子

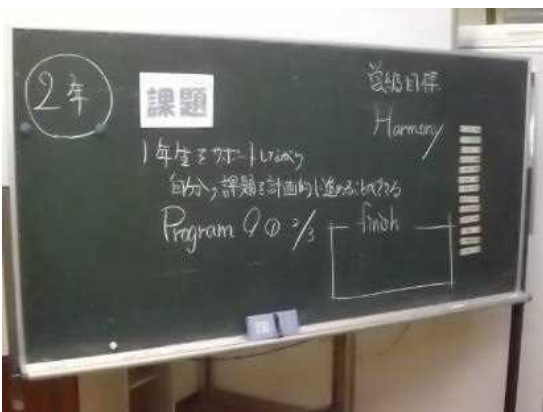


ローテーションを組んで教える生徒の様子



自由に閲覧できる教材（指導書）の提示

異学年合同の授業（中学二年、一年の英語）では、どのような座席にすれば効率よく学習でき、それぞれの学年の課題達成がよりスムーズに進むかを考えながら、授業時の座席を生徒が決定していた。一年生単独の『学び合い』の授業では落ち着きがなくなる場面も出てくることもあるが、二年生と合同で授業を行うことで、「先輩のように、真剣に課題に取り組まなければ」「自分たちもこのような姿で学習に取り組みたい」という感情を育てることにつながるということを学んだ。また、二年生単独の『学び合い』の授業では、普段教えられる側の生徒が、一年生との合同授業では教える側にまわることができ、自己肯定感や自己有用感の育成につながるということを学んだ。



「1年生をサポートしながら」という課題



異学年合同の授業の様子

上越教育大学での研修では、上越教育大学教職大学院教授 西川 純先生に『学び合い』の根幹について教授いただいた。『学び合い』が力を発揮するためには、①何のために学校に来るのか（学校観）と②子供たちは有能である（子供観）、③みんなでできる（授業観）の三つの考えを大切にして、授業を計画し、展開していかなければならないと教えていただいた。さらに、『学び合い』において教師は指導者であると同時に、生徒同士の関わり合いをつないだり、学びに必要な環境を整えたりする調整者であるということも学んだ。

また、本校で実践してみてもの質問にも答えていただいた。

- ・ 『学び合い』を進める上での、教師の意識について

教師は「集団で集団を引き上げる」意識をもたなければならない。「一人も見捨てない」ということを、繰り返し、熱く語ることが大切である。ただし、中身がなければ、生徒は見抜いてしまう。教師の目はごまかせても、生徒の目はごまかせない。

- ・ 課題ができない生徒への接し方

教員は集団全体の様子を観察して回り、課題達成のために必要な言葉を多くの人に広めるようにする。個に関わると、その生徒のつながりは教師だけになってしまったり、他の生徒が教師の助けを容易に求めたりしてしまう。教師は生徒と生徒を「つなぐ」役割を果たす必要がある。

#### （４）本校での実践を通して（授業実践、校内研修会）

普段の『学び合い』の授業をできる限り公開している。また、研修担当の教務主任と連携を図り、教育長等訪問や授業参観、『学び合い』チャレンジデーを設け、『学び合い』推進リーダーという立場で公開授業を行ったり、本校教員の授業をお互いに見学したりしている。

自主研修会として、『学び合い』の導入において教師が語るべき内容を紹介したり、『学び合い』を本校教員が実践している中で生じた悩みや分からないことを話し合ったりした。



本校での『学び合い』の様子



自主研修会の様子

#### （５）感想

先述したが、次期中学校学習指導要領に示されるように、今後はアクティブ・ラーニングの視点に立った授業を展開していく必要がある。そのための一つの方法として、この『学び合い』は有効な手段であると実感している。これまでの、1対40で中位の生徒に合わせた一斉授業に比べて、『学び合い』の授業を実践することで、生徒は自分たちで効率のよい課題への取り組み方を考えたり、お互いの取り組み方を相談して改善したりしながら生き生きと学習する姿を見ることができた。何より、課題に取り組まない生徒や机に伏してしまう生徒がいなくなった。「今日は『学び合い』やりますか？」と『学び合い』の授業を楽しみにしてくれる生徒も増えたことから、学習に積極的に取り組もうとする意欲が高まっているように感じる。

また、生徒を信頼して課題への取り組みを任せることで、授業中の生徒の様子を広い視野で観察することができ、一斉授業では観察することができなかった生徒個々の理解度や授業中だけでは把握できなかった生徒同士の人間関係、課題解決に向けて協力する態度を見ることもでき

た。そのような生徒の姿を見ることを期待して、これまで以上に教材研究をするようになり、課題が『学び合い』にふさわしいか、授業で何を準備すれば、生徒同士がより関わり合うようになるかという視点で授業を組み立てるよう努めている。

今回、学ばせていただいたことを本校教員に還元できるよう、今後も積極的な授業改善や校内研修会に取り組み、自己研鑽していきたいと思う。